

福留久大『リカード貿易論解説法』を読む
－比較生産費説の新地平－

Review on H. Fukudome's "Decoding Ricardo's Trade Theory"
－New Horizons for Comparative Production Cost Theory－

田中 史郎（宮城学院女子大学、名誉）
Tanaka Shiro (Miyagi Gakuin Women's Univ., Prof. Emeritus)

はじめに

1. 比較生産費説の通説的な解釈
 2. 比較生産費説の通説に対する批判
 3. リカード比較生産費説の新地平
 4. リカード数字例の新解釈
 5. 「別の数字例」の問題
 6. 結語
- [補論]

はじめに

福留久大（1941～2022）の最後の著作『リカード貿易論解説法』（社会評論社、2022年）は、きわめて論争的な議論を展開している。挑戦的と言ってよい。

本書は全6章で構成されているが、基本的にはすでに発表されている独立の論文から成っている（いくつかの点で修正がなされているが）。それゆえ内容的に重複する議論も見られるものの、それらを通して主に以下の3点が示されている。

それは、第1に、D.リカード『経済学および課税の原理』の徹底的なテキスト・クリティックにより、比較生産費に対するこれまでの通説的解釈に根本的な疑問を呈していること。第2に、それを踏まえて、先行研究に対して鋭い批判を行っていること¹⁾。そして第3に、さらに「福留比較生産費説」ないし「福留方式」とでもいうべき積極説を提示していること。以上が本書の意義と言えよう。

したがって、本稿においては、総花的に各章毎に紹介するのではなく、本書の論争的、挑戦的な内容が明確になるよう、問題点に焦点を当てることに努めたい。

¹⁾ 本稿では後に宇沢弘文、根岸隆の説を取り上げるが、本書には他に小宮隆太郎、中村廣治、さらにP.サムエルソンなどの説も批判的に検討されている。

1. 比較生産費説の通説的な解釈

本書が論争的な性格であり、また厳密なテキスト・クリティークに基づいているので、それを鮮明にすべく、まず、比較生産費説のオリジナルであるリカード『経済学および課税の原理』の当該部分を示し、その通説的な解釈とそれに対する福留の批判の紹介から開始しよう。

リカード『原理』には、以下のような記述が見られる。

「仮にポルトガルが他の諸国との通商関係を全くもたないとすれば、この国は、...量ばかりでなく質においても劣ったものを取得することになるであろう。

【 α 】²⁾ この国（ポルトガル）がイギリスのクロスと引き換えに与えるであろうワインの分量は、仮に両商品が共にイギリスで製造されるか、あるいは共にポルトガルで製造されるならばそうであろうように、各々の生産に向けられる労働のそれぞれの分量によって、決定されるのではない。

【 β 】 イギリスは、クロスを生産するのに 1 年間に 100 人の労働を要し、たまたもしもワインを醸造しようと試みるならば同一期間に 120 人の労働を要するかもしれない、そういった事情のもとにあるとしよう。それゆえに、イギリスは、ワインを輸入し、それをクロスの輸出によって購買するのがその利益であることを知るであろう。

ポルトガルでワインを醸造するには、1 年間に 80 人の労働を要するにすぎず、また同国でクロスを生産するには、同一期間に 90 人の労働を要するかもしれない。それゆえに、その国（ポルトガル）にとってはクロスとひきかえにワインを輸出するのが有利であろう。この交換は、ポルトガルによって輸入される商品が、そこではイギリスにおけるよりも少ない労働を用いて生産されうるにもかかわらず、なおおこなわれうるであろう。ポルトガルはクロスを生産するのに 90 人の労働を用いて製造することができるにもかかわらず、それを生産するのに 100 人の労働を要する国からそれを輸入するであろう。なぜならば、...有利だからである。」（リカード、191～192 頁）

また、以下のような記述もある。

「【 γ 】クロスは、輸入元の国で掛かる費用より多くの金に対して売れるのでなければポルトガルに輸入され得ず、またワインは、ポルトガルで掛かる費用より多くの金に対して売れるのでなければイギリスに輸入され得ない。」（リカード、194 頁）

通説的な比較生産費の解釈は、この中で【 β 】の部分をもとにして問題を立てていると思われる。福留の紹介によれば、例えば、宇沢弘文は以下のように述べているという。

²⁾ α, β 等は、田中が挿入したものである。

「リカードの分析的視点がもっとも明確に現れているのは、外国貿易にかんする有名な例である。イギリスでクロス 1 単位を生産するのに労働者 100 人、ワイン 1 単位を生産するのに労働者 120 人を必要とする。これに対して、ポルトガルでは、クロスには 90 人、ワインには 80 人の労働者を必要とするでしょう。このとき、イギリスはクロスを輸出して、ポルトガルからワインを輸入する。ポルトガルでのクロスの生産費は、イギリスより安い、それでもポルトガルはワインを輸出して、イギリスのクロスを入力した方が有利となる。この考え方が、リカードの比較生産費説である。イギリスはクロスの生産に比較優位をもち、ポルトガルはワインの生産に比較優位をもつというわけである。」（宇沢弘文『経済学の考え方』岩波新書、1989 年。福留、53 頁）

また、福留によれば、根岸隆も以下のように述べているという。

「イギリスではクロス 1 単位を生産するのに 100 人の労働が、ワイン 1 単位の生産に 120 人の労働が必要だ。ポルトガルでは、それぞれ 90 人、80 人である。イギリスは比較的生産費の安いクロスの生産に特化し、その 1 単位をポルトガル製のワイン 1 単位と交換すれば、100 人の労働で 120 人の労働の生産物が入手できる。イギリスのクロスの生産費が絶対的には高くても、比較的安ければよいというのがみそである」（根岸隆「比較生産費説は不滅」『日本経済新聞』2001 年 9 月 12 日。福留、55 頁）

これらは、第 1 に、既に引用した、リカード『原理』に示された有名な数字例を以下の表 1 のように理解し、第 2 に、それを前提として、両国のクロスとワインの生産に必要な労働者数を基に生産費を比較するという解釈で求めたものと理解できる。

表1 リカード数字例での貿易前の労働量表示(労働量による表示)

	クロス	ワイン	
イギリス	100人	120人	220人
ポルトガル	90人	80人	170人
商品の生産量	2単位	2単位	4単位

表 1 で明らかなように、クロスにおいてもワインにおいてもポルトガルの方の生産費が低く（労働者数が少なく）、その意味で絶対的な優位性を持つ。したがって、一見すると、クロスにおいてもワインにおいてもポルトガルからイギリスに、一方的に輸出がなされるようだが、そうではないという。

すなわち、これを解くのが表 2 である。イギリスにおいて、ワインに対するクロスの生産費（1 単位のクロス生産に必要な労働量 / 1 単位のワイン生産に必要な労働量）と、クロ

スに対するワインの生産費（1 単位のワイン生産に必要な労働量／1 単位のクロス生産に必要な労働量）を比較する³⁾。同様に、ポルトガルにおいてもこのような計算を行う。そうすると、以下の表 2 が得られることになる。

表2 比較生産費の通説による解釈(機会費用表示)

	ワインに対するクロスを生産費(クロス生産の労働量／ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの生産費(ワイン生産の労働量／クロス生産労働量)
イギリス	$100/120 \doteq 0.83$	$120/100 = 1.2$
(労働量の大小)	∧	∨
ポルトガル	$90/80 \doteq 1.13$	$80/90 \doteq 0.89$

このようにしてみると、ワインに対するクロスを生産費は、イギリスの方が小であり、比較優位を持っていると理解できる。同様に、クロスに対するワインの生産費は、ポルトガルの方が小であり、比較優位を持っていると理解できる。すなわち、クロスの場合、イギリスでは約 0.83 であり、ポルトガルでは約 1.13 だということである。ワインの機会費用は、イギリスでは 1.2 であり、ポルトガルでは約 0.89 である。

したがって、クロスはイギリスからポルトガルに、ワインはポルトガルからイギリスに、輸出が行われるという。これが通説的な比較生産費説の解釈であり、一般に流布している考え方である。一見すると正しいように見える。

そしてこのようにして、両国とも比較優位を持つ生産に特化して、双方が貿易を行ったとすれば、以下の表 3 に示されるような結果が得られる⁴⁾。

³⁾ これを簡便に機会費用ないし機会費用表示とも言えよう。機会費用とは、ある単一の経済主体が、複数ある行動可能性のうち、1 つの選択した場合に、選択しなかった行動を採用していたならば得られたであろう利益を指す。つまり、イギリスにおけるクロスの場合、機会費用とは、クロスを生産したことによって失われるワインの量である。すなわち、イギリスにおけるクロスの場合、機会費用は、 $100/120 \doteq 0.83$ である。つまり、イギリスでは、100 人の労働者によって 1 単位のクロスが生産されるが、その労働量がワイン生産に振り向けられれば、0.83 単位のワインを生産するところになる。1 単位ではなく、約 0.83 単位しか生産できない。くどいようだが、1 単位のクロスを得るにはワインを 0.83 単位手放せばよい、と言う意味である。

⁴⁾ むろん、ワイン生産の農園をクロス加工の工場に転換したり（当然ながら、逆も含む）、農業労働者を工場労働者に転職させたりする（当然ながら、逆も含む）ことは、現実的にはかなり困難である。たとえ可能であっても、長い時間が必要であろう。また、農園が工場に転換された（当然ながら、逆も含む）としても、以前の生産性が維持できるかは不明である。更にそれによって、価格体系も変化するかもしれない。しかし、こうした点にかんしては、議論を分かりやすくするために、とりあえず捨象して考えることにする。

表3 リカード数字例での貿易後の労働量表示

	クロス	ワイン	
イギリス	220人	0人	220人
ポルトガル	0人	170人	170人
各商品の生産量	2.2単位	2.13単位	4.33単位

見られるように、通説的な解釈による比較生産費説に従って、両国とも、比較優位にたつ商品の生産に特化して生産すれば、各商品の生産量は増加している。そして、生産を停止した商品を貿易で補え合えば、マクロ的にも両国に利益が与えられることになる。これが通説的解釈の比較生産費説に他ならない。

2. 比較生産費説の通説に対する批判

上記のリカード『原理』紹介の【β】の部分だけを見ると、宇沢の説も根岸の説も、リカードの議論と同様に見えるが、福留はそこに問題点を見つける。福留は、まず先の紹介の【γ】の部分に注目する。福留は以下のように述べている。

「(根岸氏のいう一田中)「イギリスのクロスの生産費が絶対的には高くても、比較的安ければよいというのはうそである」。それは成立不可能の命題である。同様に、宇沢氏の、「ポルトガルでのクロスの生産費は、イギリスより安い、それでもポルトガルはワインを輸出して、イギリスのクロスを入力した方が有利となる」という説明にも、うそが含まれている、故意のウソではなく無意識のウソではあるが。そしてこれもまた成立不可能の命題となる。「イギリスのクロスの生産費が絶対的には高くても、比較的安ければよいというのがみそである」という命題、「ポルトガルでのクロスの生産費は、イギリスより安い、それでもポルトガルはワインを輸出して、イギリスのクロスを入力した方が有利となる」という命題、これらはなぜ成立不可能なのか？」(福留、56頁)

福留は、続けてこの理由を述べる。

「ある同種商品についてポルトガル産がイギリス産より低価格の場合、そもそもイギリス産商品のポルトガルへの輸入そのものが成り立ち得ない。逆向きで言えば、ある同種商品についてイギリス産がポルトガル産より高価格の場合、イギリス産商品のポルトガルへの輸出が可能な道理はありようがない。そういう商品経済の基本的な事実、経済学を学ぶまでもなく自明の理である。宇沢氏と根岸氏の命題は、この商品経済の基本的な事実と反しているからである。」(福留、56頁)

あまりに当然である。貿易、例えば輸出においてそれが成立するのは、輸出品の価格が相手国内の同等商品よりも安価だからである。いわばそれ以上でもそれ以下でもない。

福留は、このように批判した後に、リカードも当然ながらこの点を示していたことを再確認する。先に、リカードから引用した【γ】部分である。「クロスは、輸入元の国で掛かる費用より多くの金に対して売れるのでなければポルトガルに輸入され得ず、またワインは、ポルトガルで掛かる費用より多くの金に対して売れるのでなければイギリスに輸入され得ない」（リカード、194 頁）、と明確に述べられていた。

そして、福留は、以下のように締めくくる。

「宇沢氏と根岸氏の説明は、前記のリカードの言明に反するし、安く買い高く売ること基本とする商品経済の下では成立しえない命題である。「イギリスのクロスを生産費が絶対的には高く」「ポルトガルでのクロスを生産費はイギリスより安い」のであれば「イギリスはクロスを輸出」できないし、「ポルトガルは」ポルトガル国内で販売ができないから「イギリスのクロスを輸入」するはずがないのが商品経済の現実である。」（福留、57 頁）

見られように、福留の彼らの対する批判は、第 1 に、商品経済における価格の論理からみても、第 2 に、リカードのテキスト解釈からみても、正当であると言える。

では、なにゆえ通説的な理解や解釈においてはこのような誤解に陥ってしまったのか。福留は以下のように、その原因を総括的に示す。

「①労働価値説に基づく（＝価格視点を欠落させた） ②一国単位の ③物々交換方式として解釈される」（福留『解説法』19 頁）

見られるように、通説的な解釈においては、リカードの議論が、以上の 3 点によって誤解をもたらしているとうわけだ。では、それに対置するものは何か、福留は続けて述べている。

「リカードの『経済学および課税の原理』においては、外国貿易は <1>価格の絶対優位を輸出入の必要条件とし <2>個別資本の独立の取引として <3>牧歌的な物々交換ではなく苛烈な価格競争として展開されること、これらが強調されている。上記①②③のような通説的理解は否定され、正反対の見地が提示されている」（福留、20 頁）

再度、敷衍しておこう。第 1 の「労働価値説に基づく（＝価格視点を欠落させた）」という批判的指摘は、以下のことを意味する。あくまでも商品売買においては、労働量が直接に現れることはなく、価値ないし価格が基準になることを強調しているのであり、先の

論者たちはその点を見落としているということである⁵⁾。第2の「一国単位の」との批判的指摘は、次のような内容である。一般の商品売買においてそうであるように、貿易においても、個々の資本家（主体）が行うのであって、国家がひとつの主体として行うものではないが、通説の論者たちはその点を見落としているという指摘である⁶⁾。そして、第3の「物々交換方式として」との指摘は以下のことを意味している。すなわち、第1、第2の点を前提とすれば、貿易はあくまでも個々の主体（資本家）による価格競争を前提としてなされるのであって、輸出入の均衡が満たされるような保証は存在しないということである⁷⁾。

このようにして福留は、通説的な比較生産費説の理解に対する批判を確定した。そして、それを踏まえて、独自ともいえる方法を提起し、問題の解決に向かう。リカード比較生産費説の正当な継承であるとともに、その発展の新地平を示すものである。

3. リカード比較生産費説の新地平

その新地平の内容を具体的に示そう。福留は、ここで「労働」と「価値・価格」との二重の視点による解決という方法を提起し、問題に立ち向かう。これは、先のリカード『原理』からの引用【 α 】の部分にもかかわる。

「「労働」と「価値・価格」との二重の視点に基づく考察は、リカードにおいても堅持されている。リカードは、引用した[B][E]⁸⁾にあるように、国内市場では資本移動が容易であるのに対して、国際市場ではそれが困難であるので、国内市場では労働価値説が適用されるが、国際市場では適用されないと想定する。そのうえで、労働価値説の妥当しないイギリスとポルトガルとの貿易取引において「100人の労働生産物（イギリスクロス）を80人の労働生産物（ポルトガルワイン）に対して与えるであろう」としている。「100人の労働生産物（イギリスクロス）」と「80人の労働生産物（ポルトガルワイン）」とが「何らかの意味で等価」であることが読み取れる。それは、「価値」ないし「価格」が等しいことを意味していると理解できる。「価値」にも単位があるものとして、価値（価格）の単位を、イギリスにおいても他の地域においても「ポンド」で表示する⁹⁾。そこで、この等価の価値水準を仮に40百ポンドと仮

⁵⁾ 既述の【 γ 】部分の記述を、再度想起されたい。

⁶⁾ リカード『原理』には、以下の文言がある。「商業上の各取引は独立の取引である」（リカード、195頁）。絶対王政や独裁国家を前提としないのであれば、当然の指摘である。

⁷⁾ これは、先の【 α 】の部分にもかかわるが、リカード『原理』にある、「イギリスがワイン生産の一方法を発見」（リカード、194～195頁）した場合に、端的に当てはまる。後に検討する。

⁸⁾ この[B]とは本稿では【 α 】を指す。なお、[E]については本文で示す。

⁹⁾ 言うまでもなく、「価値」と「価格」は次元ないし位相の異なる概念であり、価格には単位がある

定する。また、一国内では労働価値説が妥当するので、W量のイギリスクロス＝X量のポルトガルワイン＝40百ポンドである。また、一国内では労働価値説が妥当するので、X量のイギリスワインの価値は（40百×120/100＝）48百ポンドであり、W量のポルトガルクロスの価値は（40百×90/80＝）45百ポンドとなる。こうして下表のように¹⁰⁾、W量のクロスの価値は、イギリスで48百ポンドであり、ポルトガルでは45百ポンドである。イギリスクロスは、ポルトガルクロスに対して価値（価格）上で優位にあり、クロスはイギリスからポルトガルへ輸出可能である。同様に、X量のワインの価値は、ポルトガルで40百ポンドであり、イギリスでは48百ポンドである。ポルトガルワインは、イギリスワインに対して価値（価格）上で優位あり、ワインはポルトガルからイギリスに輸出可能である。貿易はあくまでも価値（価格）上の絶対優位を基礎にして行われるのであって、その内実としての労働量の相対優位が位置づけられるのである。」（福留、20頁）

長い引用になったが、ここに福留説の眼目が凝縮して示されている。立ち入って検討しよう。ここでのポイントは2つあるが、まず、前提となるリカード『原理』の関連部分を引用しておこう。福留が、引用の[E]とした部分である。

「このようにして、イギリスは、100人の労働の生産物（イギリスのクロス）を、80人の労働の生産物（ポルトガルのワイン）に対して、与えるであろう。このような交換は同国内の個人間では起こりえないであろう。100人のイギリス人の労働が、80人のイギリス人のそれに対して与えられることはあり得ない。しかし100人のイギリス人の労働の生産物は、80人のポルトガル人、60人のロシア人、または120人のインド人の労働の生産物に対して与えられ得るであろう。この点での単一国と多数国との間の差異は、資本がより有利な用途を求めて一国から他国へ移動することの困難と、資本が常に同国内で一つの地方から他の地方へ移動するその活発さとを考察することによって、容易に説明される。」（リカード、192頁）

そこで、ポイントの第1は、上の引用にある「100人の労働生産物（イギリスのクロス）を80人の労働生産物（ポルトガルのワイン）に対して与えるであろう」という文言に対する理解にかかる点である。

労働量を見る限りイギリスのクロス（100人）とポルトガルのワイン（80人）は異なった値であるが、リカードのこの文言から福留は、「何らかの意味で等価」であることを読み取る。そして、それは、「価値」あるいは「価格」から見れば等しいことを意味していると解釈する。互いが他に「対して与える」のだから、等しいエトヴァスが存在するので

ものも、価値にはそれがないとされてきた。しかし、ここではこの問題に立ち入らないこととする。

¹⁰⁾ 本稿では後に、表4として示す。

あって、それが「価値」ないし「価格」だというわけである。これまでの通説においては、「労働」量を直接的に比較する方式で考えられてきたが、福留は、そこに価値ないし価格の視点を提起したといえよう。

そして、ポイントの第2は、「国際市場では（労働価値説が）適用されない」が、「国内市場では労働価値説が適用される」（福留、20頁）という視点の提起である。なぜならば、リカードが、上の引用で述べているように、「単一国と多数国との間の差異は、資本がより有利な用途を求めて一国から他国へ移動することの困難と、資本が常に同国内で一つの地方から他の地方へ移動するその活発さ」（リカード、192頁）にあるからだ。福留の言葉で示せば、「国内では資本移動が容易であるのに対して、国際市場ではそれが困難」（福留、20頁）だからである。

改めて強調するまでもなく、商取引は労働量を前提とするものではなく、価格を通してなされる。その場合、国内取引と国際取引においては、資本移動の容易か否かが鍵を握ることになるというわけだ。

こうした視点の提起は、これまでの通説的解釈を超えており、リカード理解における新地平といってよかろう。そして、リカードの例示した数字例（本稿の表1）に新たな解釈が生まれることになった。

4. リカード数字例の新解釈

先の表1を念頭に置いて、福留のオリジナルである「福留方式」が示されることになる。表1は、イギリスとポルトガルの両国がそれぞれの労働量で「クロス」と「ワイン」をそれぞれ仮に「1単位」ずつ生産していることを示しているとする¹¹⁾。いわば貿易前の状態である。

そしてこれを、福留に倣って価格表示したものが表4である。すなわち、「福留方式」の要をなす表示法である（福留、21頁）。

表4 リカード数字例での貿易前の価格表示(福留方)

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£48百
(価格の高低)	∧	∨
ポルトガル	£45百	£40百

注) 福留『解説法』21頁の表を若干修正

この価格表示は、先のリカードの「100人の労働生産物（イギリスのクロス）を80人の

¹¹⁾ 福留は、丁寧に「W量の...クロス」や「X量の...ワイン」という表現を用いているが、ここでは簡略にするために、また、通説がしばしばそうしているように、いずれも「1単位」とした。当然ながら、論旨に変更はない。

労働生産物（ポルトガルのワイン）に対して与えるであろう」という文言を読み込み、「W 量のイギリスクロス=X 量のポルトガルワイン=40 百ポンド」¹²⁾（福留、20 頁）を基軸として計算したものである。

ここで極めて重要な点が示される。すなわち既述のように、福留は、国家間では「労働価値説」は成立しないが、国内では「労働価値説」が成立するとして、この表を導いている点である。

イギリスにおいては、100 人の労働生産物であるクロスが 40 百ポンドの価格で評価されれば、それを軸として 120 人の労働生産物であるワインは 48 百ポンドとなる。同様に、ポルトガルにおいては、80 人の労働生産物であるワインが 40 百ポンドの価格で評価されれば、それを軸として 90 人の労働生産物であるクロスは 45 百ポンドとなる。

このように見れば明らかなように、クロスの場合、ポルトガルでよりもイギリスの方の価格が安いので、イギリスからポルトガルに輸出が行われよう。また、ワインでは、反対に、ポルトガルの方に価格の優位性があり、ポルトガルからイギリスに輸出が行われよう。

いずれにしても、こうして「貿易は、価値（価格）上の絶対優位を基礎にして行われるのであって、その内実として労働量の相対優位が位置づけられる」（福留、20 頁）となる。

福留が繰り返し強調する、「〈1〉価格の絶対優位を輸出入の必要条件とし 〈2〉個別資本の独立の取引として 〈3〉牧歌的な物々交換ではなく苛烈な価格競争として展開されることが強調されている¹³⁾。」（福留『解説法』19～20 頁）という主張は、以上の方式で基本的に満たされているといえよう。

また、福留は明示していないが、こうした貿易による国際分業によって、先の表 3 のような状態になるといえる。つまり、イギリスでは、それまでのワイン労働者は全てクロス労働者としてその生産に従事することになる。同様に、ポルトガルでは、それまでのクロス労働者は全てワイン労働者としてその生産に従事することになる¹⁴⁾。

そうすると、既述のように、貿易によって、個別資本（ミクロ的）が利益を得るばかりでなく、両国全体を見た場合、いずれの商品の生産量も増大しており、両国（マクロ的）とも利益を得ることになるのである。両国の生産を合計すると、クロスは 2.2 単位に、ワインは 2.13 単位に増加している。貿易による国際分業の利益が、ここでマクロ的にも証明されたといえよう。

ここで、福留の貢献は、リカードの比較生産費説が個別資本の「価格上の絶対優位を基礎」にして生じることを示したことにある。そして、その要の論理は、「労働」と「価値・価格」との二重の視点を踏まえ、国家間では「労働価値説」は成立しないが、国内では

¹²⁾ ここでも便宜的に、「W 量のイギリスクロス」、「X 量のポルトガルワイン」ではなく、それぞれ「1 単位」として理解しておく。

¹³⁾ 〈3〉の「牧歌的な物々交換ではなく苛烈な価格競争として...」に関しては、後に再度示す。

¹⁴⁾ 先の注で示したように、国内において資本移動が容易とはいえ、こうしたことは短時間では起こりえない。しかし、ここでも議論を分かりやすくするために、極端な想定をあえて行っている。

「労働価値説」が成立するとして労働量表示を価格表示に迂回的に変換するというプロセスをとったことにある。

以上の論理に、異論はない。第 1 に、学説史には、リカードの正当な理解を示したこと、第 2 に、理論的には、商品経済での経済行為は、価格をシグナルとして、あくまでも個別資本が主体をなすことを明確にしたこと、この 2 点において支持し得る。

だが実は、リカードの示した数字例（表 1）を、通説のように解釈しても、福留のように理解しても、結果から見れば同様になる。労働量をもって各商品の比較生産費を算出する方式、すなわち機会費用をもって理解する方式で、貿易が行われることを示すことで表 3 が導かれた。また、福留のように、価格を媒介して算出する方式で理解して、貿易が行われるとすれば、やはり表 3 が導かれることになる。リカードの掲げた数字例では、いずれも表 3 のような結果を得られるのである。

しかし、必ずしも明示的に示されていないが、この問題は次のような場合には明確な違いをもたらす。リカードのいう「イギリスがワイン生産の一方法を発見」（リカード、194 頁）した場合である。続いて検討しよう。

5. 「別の数字例」の問題

以下に見るように、リカードは、イギリスでワイン生産において新方法が発見され、ワインの価格が下落した場合を問題としている。関係部分を引用しよう。

「イギリスがワイン生産の一方法を発見し、そこでそれを輸入するよりはむしろそれを生産する方がその利益になるものと仮定すれば、イギリスは当然その資本の一部を外国貿易から国内産業へ転換するであろう。イギリスは、輸出のためにクロスを生産することを止めて、自国でワインを生産するであろう。これらの商品の貨幣価格は、それに応じて左右されるであろう、すなわち、イギリスではクロスは引き続いて以前の価格にあるのにワイン（の価格）は下落し、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更は起こらないであろう。クロスは、その価格がポルトガルではイギリスよりも引き続いてより高いから、しばらくの間はイギリスから引き続いて輸出されるであろう。しかし、それと引き換えに（イギリスには）ワインではなく貨幣が与えられるであろう。」（リカード、194～195 頁）

リカードのこうした指摘に対して、福留は以下のように述べている。

「イギリスでのワイン生産の技術革新によってポルトガルのワイン生産のイギリスのそれに対する絶対的優位性が失われると、（ポルトガルワインのクロス生産に対する相対的優位性は保持していても）ポルトガルワインの輸出は不可能になり貨幣によ

る支払いを余儀なくされるのである。ポルトガルはクロス輸出だけでなく、ワイン輸出も不可能となる、いわゆる片貿易の状態に陥る事例である。ここからは、貿易取引が牧歌的な物々交換ではなく、苛烈な価格競争として展開されること、同種商品間の価格競争に敗れて輸出商品なしの国も存在し得ることが読み取れる。」(福留、47頁)

やや繰り返しになるが、例えば、ある国である商品の生産に技術革新が起こり、価格の優位性がもたらされると、その商品を輸出していた他の国ではその価格の優位性が失われる場合が起こるといえる問題である。こうした場合、価格競争が展開されることにより、いわゆる片貿易の状態に陥るといえることが強調されている。

こうした提起を踏まえ、この問題を「別の数字例」として考えておこう。

例えば、イギリスにおいて、ワイン生産の技術革新によって、それまで120人であった必要労働者数が90人になったとしよう¹⁵⁾。これをこれまでと同様に示せば、表5になる。

表5 別の数字例での貿易前の労働量表示

	クロス	ワイン	
イギリス	100人	90人	190人
ポルトガル	90人	80人	170人
商品の生産量	2単位	2単位	4単位

この表5を前提として、通説のように両国のそれぞれの商品の労働量で測った比較生産費、すなわち機会費用を求めると以下のようなになる¹⁶⁾。

表6 別の数字例での通説による解釈(機会費用表示)

	ワインに対するクロスの生産費(クロス生産の労働量/ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの生産費(ワイン生産の労働量/クロス生産労働量)
イギリス	$100/90 \approx 1.11$	$90/100 = 0.9$
(労働量の大小)	∧	∨
ポルトガル	$90/80 \approx 1.13$	$80/90 \approx 0.89$

¹⁵⁾ ここでは、例として「90人」とした。それは、その値をXとし、表1を出発点とした場合、 $100 \times 80/90 < X < 100$ の一例として示したものである。ここから窺えるように、Xの値が、「 $100 \times 80/90$ 」と「100」とを境界にして、貿易パターンは5種類のバリエーションとなる。第1は、 $X > 100$ 場合、第2は、 $X = 100$ の場合、第3は、 $100 \times 80/90 < X < 100$ の場合、第4は、 $X \approx 89$ の場合、そして第5は、 $X < 100 \times 80/90$ の場合、である。このうち、第4の $X \approx 89$ の場合のみ、通説のように考えれば、クロスの機会費用もワインの機会費用も、イギリスとポルトガルの両国で等しくなり、貿易取引は生じない。しかしそれ以外は、通説のように解釈すれば、双方向貿易が行われることになる。福留のいう、牧歌的な貿易のイメージが成立することになる。詳細については、「補論」を参照されたい。

¹⁶⁾ 先と同様に、これを機会費用表現としてもよい。

見られるように、ワインに対するクロス生産費はイギリスの方が小であり、イギリスが比較優位を持っていると理解できる。同様に、クロスに対するワイン生産費はポルトガルの方が小であり、ポルトガルが比較優位を持っていると理解できる。この点は、先の表2と同様である。

したがってこのように通説的に比較生産費説を理解すれば、相変わらず、クロスはイギリスからポルトガルに、ワインはポルトガルからイギリスに、輸出が行われるということになる。

そうだとすると、先のリカードの指摘、すなわち、「イギリスではクロスは引き続いて以前の価格にあるのにワイン（の価格）は下落し、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更は起こらないであろう。」（リカード、194～195頁）という指摘をどのように理解すべきか。

上に示したように、比較生産費説の通説的な解釈からは、このリカードの指摘を説明できない。では、福留方式ではどうか。先に倣って、算出してみよう。すなわち、第1に、「イギリスクロス=ポルトガルワイン=40百ポンド」を基軸として把握する。第2に、国内では労働価値説が成立することを踏まえ、それにしたがって価格での表示を試みる。このようにして表7が導かれる。

表7 別の数字例での貿易前の価格表示(福留方式による価格表示)

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£36百
(価格の高低)	Λ	Λ
ポルトガル	£45百	£40百

そうすると、先の表6とは全く異なった結果が得られる。イギリスではクロス価格に変化はないが、ワインの価格は下落していること、また、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更のないことが示されている。「すなわち、イギリスではクロスは引き続いて以前の価格にあるのにワイン（の価格）は下落し、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更は起こらないであろう。」（リカード、194～195頁）という文言と一致することになる。

ここで、リカードの指摘が過不足なく成立していることが明らかである。その意味で、福留方式は正当なリカード理論の継承といえる。

さらに、表7が明らかにしているように、クロス価格もワイン価格も、ポルトガルよりイギリスの方が低い。したがって、クロスもワインも、イギリスからポルトガルに輸出され、いわゆる片貿易の状態になる。先のリカードの文言では「クロスは、その価格がポルトガルではイギリスよりも引き続いてより高いから、しばらくの間はイギリスから引き続いて輸出されるであろう。しかし、それと引き換えにワインではなく貨幣が与えられるであろう。」ということに他ならない。

福留のいう、「貿易取引が牧歌的な物々交換ではなく、苛烈な価格競争として展開され

ること」（福留、47頁）の内容が明確に示されているのである。

6. 結語

本稿の冒頭に、本書の意義として、リカード『経済学および課税の原理』の徹底的なテキスト・クリティーク、先行研究に対する批判、そして、「福留比較生産費説」ないし「福留方式」とでもいうべき方法の提起をあげた。これまでの紹介で、これらの内容が全面的の明らかになっただろう。

すなわち、「福留比較生産費説」は、貿易の主体を国家などではなく個別の資本家ないし当事者におき、それゆえ、その行動には当然ながら価格上の優位性が前提となり、その結果、国際市場では価格競争として展開されることを示した。そこには、労働と価値（価格）との二重の観点が不可欠であり、また、国内においては資本移動の容易さからいわゆる労働価値説の論理が通用するが、国際市場ではそうした事態には至らないことも明らかにされた。

これらは、いずれも必ずしも明示的ではないとはいえリカードにより提起されていた内容だが、これまでは残念ながら無視されてきたといわざるを得ない内容である。

すでに見たように、比較生産費説の通説的な解釈においては、いわゆる労働量で測った比較優位性に基づいて貿易がなされるとされてきた。そのような比較優位は、かなり稀な場合を除き存在する。そうであるならば、いわば過不足のない双方向の貿易がなされることになり、いわゆる片貿易はあり得ないことになる。だが、それはあまりにも現実離れしている。福留は、こうした点にかんして、「牧歌的な物々交換ではなく苛烈な価格競争」（福留、20頁）と表現した。国際経済や貿易を捉える基礎理論として、こうした認識は重要である。

このようにみると、福留の提起した理論、「福留比較生産費説」は、経済学史研究や国際経済学研究に多大な影響を及ぼすことになるだろう。本稿では福留説の核心部分を紹介する形で検討してきたが、本稿がそうした議論の話題や素材になれば幸いである。

[補 論]

注で述べたように、例えば、イギリスでのワイン生産の技術革新によって、ワイン生産にかかわる労働者の人数が変化する。その労働者を X とした場合、本文の表 1 を出発点とすれば、 X の値が、「100」と「 $100 \times 80/90$ 」とを堺にして¹⁷⁾、貿易パターンに 5 種類の

¹⁷⁾ 「 $X=100$ 」とは、後にみるように、福留方式によった場合、ワインの価格がイギリスとポルトガルの両国で等しく（40 百ポンド）なる値である。また、「 $X=100 \times 80/90$ 」（分かりやすくするために $X \approx 89$ とした）とは、通説にしたがった場合、クロスの機会費用もワインのそれも、イギリスとポル

バリエーションができる。Xの値が大きい方からみて、第1、 $X > 100$ 場合、第2、 $X = 100$ の場合、第3、 $100 \times 80/90 < X < 100$ の場合、第4、 $X = 89$ の場合、そして第5、 $X < 100 \times 80/90$ の場合、である。

そこで、それぞれについて、まず、出発点として「労働量による表示」を示し、それを前提として、次に「通説による機会費用表示」を確認し、そして「福留方式による価格表示」を明示する。これによって、「通説による機会費用表示」と、「福留方式による価格表示」の差異が明らかになる。こうして、貿易論にとって前者の限界と、後者の意義が鮮明になる。

(1) $X > 100$ の場合

ここでは判りやすく、その具体例として、 $X = 110$ とする。そうすると、以下の付表 1-1 のように示される。これを前提として、通説による機会費用表示と、福留方式による価格表示を掲げてみよう。

付表1-1 労働量による表示

	クロス	ワイン
イギリス	100人	110人
ポルトガル	90人	80人
各商品の生産量	2単位	2単位

まず、通説による機会費用表示を示す（付表 1-2）。

付表1-2 通説による機会費用表示

	ワインに対するクロスの生産費 (クロス生産の労働量 / ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの生産費 (ワイン生産の労働量 / クロス生産労働量)
イギリス	$100/110 \doteq 0.91$	$110/100 = 1.1$
(労働量の大小)	Λ	V
ポルトガル	$90/80 \doteq 1.13$	$80/90 \doteq 0.89$

付表 1-2 により明かのように、通説による機会費用表示においては、イギリスにおいてはクロスに、ポルトガルにおいてはワインに、比較優位が認められる。この例では、イギリスはクロスを輸出し、ワインを輸入する。また、ポルトガルはワインを輸出し、クロスを輸入することになる。このような相互貿易が成立する。本文の表 2 と同様な内容になる。

では、次いで本文で示したような福留方式で価格表示をしてみよう。

付表1-3 福留方式による価格表示

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£44百
(価格の高低)	Λ	V
ポルトガル	£45百	£40百

ポルトガルの両国において等しくなる値である。

付表 1-3 にみられるように、クロスはイギリスの方がポルトガルのもよりも低く、また、ワインの価格はポルトガルの方がイギリスのもよりも低く。つまり、クロスはイギリスからポルトガルに輸出され、ワインはポルトガルからイギリスに輸出されることになる。このような相互貿易が成立する。X>100 場合では、本文で示した、リカードの数字例と同様になる。

(2) X=100 の場合

この場合では、以下の付表 2-1 のように示される。これを前提として、通説による機会費用表示と、福留方式による価格表示を掲げてみよう。

付表2-1 労働量による表示

	クロス	ワイン
イギリス	100人	100人
ポルトガル	90人	80人
各商品の生産量	2単位	2単位

先と同様に、以下は通説による機会費用表示である（付表 2-2）。

付表2-2 通説による機会費用表示

	ワインに対するクロス の生産費(クロス生産の労働量/ ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの 生産費(ワイン生産の労働量/ クロス生産労働量)
イギリス	$100/100=1$	$100/100=1$
(労働量の大小)	∧	∨
ポルトガル	$90/80 \doteq 1.13$	$80/90 \doteq 0.89$

付表 2-2 により明かのように、通説による機会費用表示においては、イギリスにおいてもクロスに、ポルトガルにおいてもワインに、比較優位が認められる。この例では、イギリスはクロスを生産し、ワインを輸入する。また、ポルトガルはワインを生産し、クロスを生産することになる。このような相互貿易が成立する。

では、次いで本文で示したような福留方式で価格表示をしてみよう。

付表2-3 福留方式による価格表示

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£40百
(価格の高低)	∧	∥
ポルトガル	£45百	£40百

付表 2-3 にみられるように、クロスはイギリスの方がポルトガルのもよりも低いものの、ワインの価格はポルトガルもイギリスも同じである。つまり、クロスはイギリスからポルトガルに輸出されるが、ワインの貿易は生じないことになる。このような片貿易が生じよう。

(3) $100 \times 80/90 < X < 100$ の場合

ここでは、この具体例として、 $X=90$ とする（本文の表 5、6、7 と同様）。以下の付表 3-1 のように示される。これを前提として、通説による機会費用表示と、福留方式による価格表示を掲げてみよう。

付表3-1 労働量による表示

	クロス	ワイン
イギリス	100人	90人
ポルトガル	90人	80人
各商品の生産量	2単位	2単位

以下は、この通説による機会費用表示である（付表 3-2）。

付表3-2 通説による機会費用表示

	ワインに対するクロスの生産費(クロス生産の労働量/ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの生産費(ワイン生産の労働量/クロス生産労働量)
イギリス	$100/89 \approx 1.11$	$89/100 = 0.9$
(労働量の大小)	Δ	∇
ポルトガル	$90/80 \approx 1.13$	$80/90 \approx 0.89$

付表 3-2 により明かのように、通説による機会費用表示では、イギリスにおいてはクロスに、ポルトガルにおいてはワインに、比較優位が認められる。この例では、イギリスはクロスを輸出し、ワインを輸入する。また、ポルトガルはワインを輸出し、クロスを輸入することになる。このような相互貿易が成立する。

では、次いで本文で示したような福留方式で価格表示をしてみよう。

付表3-3 福留方式による価格表示

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£36百
(価格の高低)	Δ	Δ
ポルトガル	£45百	£40百

付表 3-3 にみられるように、クロスの価格はイギリスの方がポルトガルのそれよりも低く、また、ワインの価格もイギリスの方がポルトガルのそれよりも低い。つまり、クロスもワインもイギリスからポルトガルに輸出されることになる。このような片貿易が生じよう。付表 3-2 と付表 3-3 の示す数値は全く対照的な結果を示している。

個別資本の競争を前提とすれば、牧歌的な相互貿易ではなく、熾烈な片貿易にならざるを得ない。

(4) $X \doteq 89$ の場合¹⁸⁾

この場合は、以下の付表 4-1 のように示される。これを前提として、通説による機会費用表示と、福留方式による価格表示を掲げてみよう。

付表4-1 労働量による表示

	クロス	ワイン
イギリス	100人	89人
ポルトガル	90人	80人
各商品の生産量	2単位	2単位

同様に、以下は通説による機会費用表示である（付表 4-2）。

付表4-2 通説による機会費用表示

	ワインに対するクロスの生産費(クロス生産の労働量/ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの生産費(ワイン生産の労働量/クロス生産労働量)
イギリス	$100/89 \doteq 1.12$	$89/100 = 0.89$
(労働量の大小)	II	II
ポルトガル	$90/80 \doteq 1.13$	$80/90 \doteq 0.89$

注) ワインに対するクロスの生産費に若干の差異があるように見えるが、四捨五入による誤差の範囲である。

付表 4-2 により明かのように、通説による機会費用表示では、イギリスにおいてもポルトガルにおいても、比較優位が認められない。この例では、イギリスとポルトガルにおける貿易は成立しないことになる。

では、次いで本文で示したような福留方式で価格表示をしてみよう。

付表4-3 福留方式による価格表示

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£35.6百
(価格の高低)	Λ	Λ
ポルトガル	£45百	£40百

付表 4-3 にみられるように、クロスの価格はイギリスの方がポルトガルのそれよりも低く、また、ワインの価格もイギリスの方がポルトガルのそれよりも低い。つまり、クロスもワインもイギリスからポルトガルに輸出されることになる。このような片貿易が生じよう。付表 4-2 と付表 4-3 の示す数値は全く別な結果を示している。

個別資本の競争を前提とすれば、牧歌的な相互貿易ではなく、熾烈な片貿易にならざるを得ない。

¹⁸⁾ 正確には、 $X=100 \times 80/90$ だが、簡略化して、 $X \doteq 89$ とした。

(5) $X < 100 \times 80/90$ の場合

この場合の具体例として、 $X=70$ とする。以下の付表 5-1 のように示される。これを前提として、通説による機会費用表示と、福留方式による価格表示を掲げてみよう。

付表 5-1 労働量による表示

	クロス	ワイン
イギリス	100人	70人
ポルトガル	90人	80人
各商品の生産量	2単位	2単位

同様に、通説による機会費用表示である（付表 5-2）。

付表 5-2 通説による機会費用表示

	ワインに対するクロスの生産費(クロス生産の労働量/ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの生産費(ワイン生産の労働量/クロス生産労働量)
イギリス	$100/90 \doteq 1.43$	$70/100 = 0.7$
(労働量の大小)	V	^
ポルトガル	$90/80 \doteq 1.13$	$80/90 \doteq 0.89$

付表 5-2 により明かのように、通説による機会費用表示では、イギリスにおいてはワインに、ポルトガルにおいてはクロスに、比較優位が認められる。この例では、イギリスはワインを輸出し、クロスを輸入する。また、ポルトガルはクロスを輸出し、ワインを輸入することになる。本文での、リカードが示した数字例とはいわば逆の関係になる。ともあれ、このような相互貿易が成立する。

では、次いで本文で示したような福留方式で価格表示をしてみよう。

付表 5-3 福留方式による価格表示

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£28百
(価格の高低)	^	^
ポルトガル	£45百	£40百

付表 5-3 にみられるように、クロスの価格はイギリスの方がポルトガルのそれよりも低く、また、ワインの価格もイギリスの方がポルトガルのそれよりも低い。つまり、クロスもワインもイギリスからポルトガルに輸出されることになる。このような片貿易が生じよう。付表 5-2 と付表 5-3 の示す値は全く別な結果を示している。

若干、まとめておこう。これまで明らかにしてきたように、比較生産費説の通説的に解釈に基づけば、上の (4) $X \doteq 89$ の場合では、クロスの機会費用もワインの機会費用も、イギリスとポルトガルの両国で等しくなり、貿易取引そのものが生じない。もっともこうした例は現実にはほとんど起こりえないだろう。ともあれ、それ以外は全て何らかの比較優位が生じ、理論的には双方向の貿易がなされることになる。言い換えれば、片貿易は存在

しないことになる。いわば「牧歌的」な貿易のイメージが想定されよう。

だが、福留の提起した方法によれば、(1) $X > 100$ の場合を除き、全てにおいて片貿易が生じることになる¹⁹⁾。貿易は国際市場においては、福留が強調したように「苛烈な価格競争として展開される」（福留、47頁）のである。福留によってこうした貿易に関する基礎理論が明らかにされたと言えよう。

文献

David Ricardo, *On the Principles of Political Economy, and Taxation* (Second Edition 1819)。(リカード(羽鳥卓也・吉澤芳樹訳)『経済学および課税の原理』上下、岩波文庫、1987年)。なお、引用のさいのページ数は本書(上)のそれを示すが、訳文は必ずしも本書によらない。
福留久大『リカード貿易論解説法』社会評論社、2022年

¹⁹⁾ このようにみても、冒頭でも紹介した、よく知られるリカードの示した数字例に意味深いものを感じず。あの数字例は、一見、単なる例のように思われるが、実は、入念に考えられた組み合わせなのかもしれない。リカードの示した、イギリスにおけるワイン生産の新方法発見の例も吟味すると、その感がより強くなる。